

炎環

永井路子



炎環

永井路

光風社書店版

炎 環

定価 880円

昭和54年6月25日 初版発行
昭和57年8月1日 再版発行

書籍コード 0093
031501
2265

著 者 永井路子
発行者 深見兵吉

本文印刷 八光印刷
カバー印刷 大平舎美術印刷

発行所 光風社出版

〒112 東京都文京区関口1-32-4
電話(03)204-2441 振替東京8-12913

~~~~~  
落丁・乱丁などの不良本はお取り替えいたします

目次

悪 禅 師  
黒 雪 賦  
い も う と  
覇 樹

五

三

一五

二〇七

装  
幀  
佐  
多  
芳  
郎

# 炎 環



## 悪禅師

### 一

京の醍醐寺に預けられていた今若が、異母兄頼朝の旗あげをきいて、武州鷲沼の陣屋に駆けつけたのは、治承四年十月一日のことである。

「平家追討の綸旨をうけられたと聞いて、もう矢も盾も堪らず飛んで参りました」  
得度して全成と名乗っていた二十八歳の青年僧、今若は、貪るように異母兄の顔をみつめていた。

——ちつとも似ていないな。俺とは……

それが彼の、初対面の兄に対する第一印象だった。もっともこれは初めから想像はしていたことだ。今若、乙若、牛若の三人兄弟のうち、一番常磐に似ているといわれた彼と、母の違う兄と共に通点がある筈はないのである。

が、全成にとって意外だったのは、頼朝のどこにも亡父の倅の感じられないことだった。八つの時別れたきりの父の顔、うろ覚えに覚えている義朝の顔は武骨で逞しかった。なのに目の前の異母兄は色白で、ひどくおっとりとしていて、京で育った自分よりもむしろ公家風でさえあった。全

成は妙に肩すかしをくわされたような気がした。

しかも頼朝の顔にはつい二月前までの長い流人生活の翳が微塵も感じられない。石橋山で一敗地にまみれて安房へ逃れ、両総、武蔵で態勢をたて直したばかりだというのに、肩肘怒らせた坂東武者を左右に侍らせて、生れついで総大将であるかのように、ゆったりと構えている。

——むむ、これは……

全成はひそかに唸った。僧侶という男ばかりの集団の中でいじめられ、ひねくれて育った自分とは明らかに違うようだ。この異母兄は、肉親とは言え、殆ど見ず知らずの俺をどんなふうに迎え入れるつもりなのか？

闇の中を手さぐりするような慎重さで言葉を選びながら、全成はぼつぼつと話し始めた。

「夢のようです、兄上……寺に預けられてから二十年。どんなにこの日を待っておりませんでしたか……」

「……………」

「夜陰にまぎれ、ひそかに寺を逃れましたものの、いつ追手に遇うかと、気が気ではありませんでした」

「……………」

頼朝は無言である。謙虚に手をつかえてはいたが、全成は兄の顔に現れるどんな微細な変化も見逃さないつもりだった。

「野に伏し、山に伏し、道なき道を横切って参りましたが、醍醐での荒行が思わぬ所で役立ちました」

「……………」

「醍醐は修験の山です。野宿も断食も馴れております。羽黒山下降の山伏の態を装い、習い覚えた真言陀羅尼を誦し……」

言いかけて全成はふっと口を噤んだ。

彼は見たのである。じつと彼に注がれていた兄の大きな双の瞳が、このとき透明な薄い膜に蔽われはじめたのを。そしてその膜が、かすかにふるえ砕けて、やがて玻璃のように光っては静かに頬をつたい落ちるのを……

頼朝は泣いていたのだった。

千葉常胤、上総広常、江戸重長——並みいる武將の目も憚らず、三十四歳の壮男であることも、源氏の総帥であることも、凡て忘れ果てたように、彼は涙を拭おうとさえしなかった。

全成は不思議なものでも見るように、彼は兄の頬をつたう涙を眺めていた。途すがら、いくつかのめぐりあいの形を胸に描いては来たが、こんなふうな迎えかたをされるとは思ってもみないことだった。兄を慕って命がけて飛んで来たように言っただけでも、彼はそれほど血のつながりを信じていたわけではない。いや、むしろ、実の母の常磐をさえ信じてはいない全成なのである。

世間では、自分の操にかえて三人の子の命を護った常磐のけなげさに共感する声はあっても、その声は殆ど聞かれない。が、長ずるに従って、全成は清盛に体を許した母の行爲を、ただ純粹に自分たち子供のためというように、甘く美しく考えることは出来なくなっている。自分たちとは音信不通のまま清盛の娘を生み、やがて一条長成に再嫁してまた子を生んでいる母を憎みはしなかったが、意地悪くそれをみつめ、所詮血のつながりとはそのくらいなものだ、と思うのである。

その全成が僅かな血を頼って、いま頼朝の許へ馳せつけたのは、まだ見ぬ兄を慕ってのことではなく、それ自身が彼にとって一つの賭だったからだ。

彼は醍醐での修業に倦いていた。修験の荒行が辛かったわけではない。優型の体つきに似合わない膂力の持主で、荒法師達にも、さすが典厩（義朝）の遺児よと舌を巻かせた彼だった。いや、それだけに、長ずるに従って、男だけの集まりの歪んだ愛欲や権勢欲の狭さが息苦しくなり、この環境を打破る機会を、ひそかに狙っていたのである。

そこへ聞いたのが兄の旗上げだった。これ以上の好機はなかった！ が、実の所、頼朝の顔を見るまでは、彼がどんな風に自分を受入れてくれるか、不安でないことはなかった。兄弟とはいえ、母も異にし、これまで顔も見たことのない相手なのだから……

ところがどうだろう。兄は人目も構わず、泣いて彼を迎えたではないか。長い間人の顔色を読み、自分の感情を隠すことに馴れて来た全成にとって、兄の誰憚らない感情の流露は、まぶしくさえあった。

頼朝の前を退って陣屋を出ると、初冬の澄徹な空気が彼をおし包んだ。目にあたるのは、なだらかな丘陵にかこまれた、やさしい醍醐の自然ではなくて、ひどく素気ない赤茶けた草原の拡がりである。

野の果てで風が鳴った。草を分けて荒々しく押しよせて来るその風にまともに胸をむけて、全成は長い間そこに立ちつくしていた。

数日後全成は頼朝に従つて鎌倉に入った。頼朝は父義朝にもゆかりのあるこの地を本拠と定め、新府作りを始めた。京から伝わつて来る平家の動向には予断を許さないものがあつたが、かえつてそれに闘志をかきたてられて、鎌倉府の建設は目まぐるしく進んだ。

初冬の透明な空気を震わせて、鑿の音は絶えず全成の耳に響いて来た。が、やがて、その鑿の音に気がつかなくなるほど、彼自身、多忙の渦に巻きこまれていた。坂東武者の持たない文事的な教養が役に立つて、彼はいつか兄の側近になくはならない人間になつていたのである。

頼朝は何かにつけて全成の名を呼んだ。二十年間忘れていた肉親というものの出現に戸惑い、その距離を計りかねているようなところが彼にはあつた。仔犬がじゃれるような童子めいた狎れ狎れしさをふいに覗かせては、かえつて自身でどぎまぎしたりしている兄を、むしろ静かに眺めているのは全成のほうだった。彼は素手の黒衣にすぎない自分が、日一日と兄の心の中に占めてゆく重みをじつと計つていた。

とにかく万事は至極順調といえた。全成の望んだ通りの新しい人生が日一日と開けつつあつた。生れたての新府は混沌とした喧騒の中にあり、何の脉絡もない雑事が、夜明けと共に潮鳴りのように彼に襲いかかつて来るのだが、二十八歳の全成には、その忙しさをうけとめることが快かつた。

頼朝の全成への信頼は次第に深まったようである。伊豆に隠れていた妻の政子がやつて来たときも、頼朝は、まっさきに彼に引きあわせた。京女を見なれた目には、色の黒い、ちよつと嶮のある

眼差しの義姉は、さほど美しいとも思われなかったが、そんな気配は毛ほども見せず、全成はただ謙虚に挨拶した。

政子の方では、女性的ともいえる鬚のある彼の風貌に、かなり好意を持ったようだ。政子が来て数日後、邸宅の造営もやっと緒についたばかりだというのに、鎌倉では早くも陣触れの兵鼓が鳴った。平維盛が大兵を率いて、駿河国へ押し出して来たという報が伝わったからである。十月十六日、頼朝は源氏の総力をあげて足柄を越えて行った。

それから毎日、留守を預る全成の許に、頼朝軍の動静が伝えられた。旗あげ以来、初めて平家の本隊と正面切って対決するわけだったが、全成の許に送られて来る情報はみな幸先のよいものだった。

十八日——黄瀬川に着陣、石橋山の敗戦のあと、安房で別れた北条時政が、甲斐信濃の源氏の兵力を糾合してやって来た。

十九日——敵対していた伊東祐親父子を虜にした。

そして二十日——富士川に着陣、先手を承った甲斐源氏武田信義の夜半の奇襲に、敵は殆ど戦うこともなく潰走したという知らせが入り、それを追いかけるように、頼朝が鉾を収めて帰還の途にあることを報ずる使者がついた。

鎌倉はまた騒々しくなり、全成は兄の凱陣を迎える準備に忙殺された。そしてやがて、脂と砂塵の匂いのする武者たちが鎌倉の街に群れはじめたとき、彼は一つの噂を聞いた。

富士川の合戦の後、黄瀬川の陣屋に、頼朝の弟と称する小冠者が現れて対面を申し入れたという。頼朝は冠者の年恰好を聞いて、それは定めて常磐殿の末子、九郎（牛若）であろうと彼を招き入れ、

手を取り、涙を流して喜んだ、というのである。

それを聞いたとき、ふっと全成は顔色を変えた。

九郎の来たことが意外だったのではない。乳呑み児の時別れて以来会ってはいなかったが、全成は九郎が遅かれ早かれ必ず現れるに違いないという気さえしていたのだ。

全成に顔色をかえさせた原因は、九郎を迎えた頼朝のなかにある。

――泣いたのか、俺のときと同じように……

満座の中で濡れた頬を拭おうともしない頼朝の姿が想像できた。泣いたのか、二度までもぬけぬけと……全成が異母兄を心の許せない人だと思つたのはこの時からである。

が、頼朝は全成と殆ど顔をあわす暇もなく、慌しげに常陸の佐竹攻めに発つてしまった。九郎が全成を訪ねて来たのはその後間もなくのことである。

冬にしては暖かな昼下りだった。全成は九郎を海辺に誘い出した。とろりと凪いだ海は青いというよりも、黄を含んだ甘い緑色にひかっている。

「暖かなんですね、相州の海は。鞍馬の冬も陸奥の冬も、こんなもんじゃありません」

後からついて来た九郎は、反つ歯を見せてにこにこ笑った。元服して義経と名乗っている九郎は二十二の筈だが、小柄なせい、ずっと稚なげに見える。二十年近く別れたきりの全成に向つて、彼は、まるでついこの間まで一緒にいた兄弟のような人なつこきで語りかけて来た。

鞍馬でのつらい修業、奥州への脱出、平泉の厳しい冬、そして庇護者である秀衡の反対を押し切つての再脱出……

少しせかせかせした口調で喋る弟をみつめながら、こいつも俺にはちっとも似ていないな、と全成

は思った。全成が母親からうけついだすなりした鼻筋、ちょっとけ口の口許、京育ちらしい線の細さは、九郎の顔に痕さえも遺してはいなかった。

顔ばかりではない。同じように寺の修業をさせられて育ちながら、全成のような、ねじまげられた陰気さはどこにもなかった。反っ歯で色の黒い、貧相な体つきには源氏の嫡流らしい品格はなかったが、野育ちの向う気の強さが噎<sup>む</sup>せるばかりに溢れている。恐らく兄弟の中で一番いじめられ、危い目にも遇っている筈なのに、それがひとつも応えていないらしい。命をかけた奥州への脱出行も、今度の再脱出をも、九郎はまるで楽しい冒険譚のように語った。

「でも、せっかく来たのに残念でした。一足違いで合戦が終っちまって」

「戦いに加わるつもりだったのか」

「ええ、兜首の一つや二つ、取れないことはないと思っただんです」

反っ歯の口をあけて照れたように笑うと、九郎はひょいと足許の砂を蹴った。話しながらもちつともじつとしていない敏捷な体つきの彼は、本気で、はずみのついた鞠<sup>まり</sup>のように敵陣に飛びこむつもりだったのかも知れない。

「兄上はお泣きになられたそうだな」

さりげなく全成が聞くと、

「ええ」

九郎は急に笑顔を引っこめて小さな声で答えた。

「ほんとに……ほんとうにお泣きになったんです。みんなのいる前で、私の手を執られたまま……」

「……………」

「よもや、そんなに喜んで下さるとは、思ってもいませんでした。何しろお目にかかったことのな  
い弟なんですから……そんな奴は知らぬ、とおっしゃられてもそれまでです。それを……」

九郎は声を途切らせ、目をしばたいた。あの日の感動が再び甦ったのか、暫く無言で光る海  
をみつめていたが、

「でも、変なものです。兄上の涙を見たとき、ああ、二十年、自分はほんとにひとりぼっちだっ  
たんだなって思っただけです。これまでは、そんなこと、思っても見なかったのに……」

そう言う和小鼻をひくひくさせた。黙って話を聞いていた全成は、その時、細面の顔をふいに九  
郎に向けた。

「兄上は俺の前でも泣かれた。同じようにな……」

「え？」

九郎もまっすぐ顔を向けてきた。が、やがて目を落すと、小さく、

「……そうですか。涙もろい、気のやさしい方なんです、兄上は……」

感動をこめた声だった。

全成は一步步近づいて何か言いかけたが、九郎の睫の震えているのを見ると、ふっと口を閉じて、  
何げなく海の方へ視線をそらせた。

海は依然として翡翠色にひかり、波間に小さな白い鳥の一群れが、静かに浮き沈みしている。

「何の鳥かな、あれは……」

乾いた声で全成は言った。

「どれ？ どこです？」

のびあがるようにした九郎は、その時、兄の頬に薄い嗤わらいが泛はんでいるのに気づいてはいなかった。

### 三

佐竹攻めを終って、頼朝はまもなく鎌倉に帰って来た。その直後、全成と二人きりになったとき、  
「九郎に会ったか」

頼朝はさりげなく尋ねた。

「は、尋ねて参りました」

「……………」

「兄上が泣いて迎えて下さったと、大変な喜びようでした」

頼朝がちらりと視線を投げてから、急いで顔をそらせたのを、全成はわざと気づかないふりをした。

「物心つかぬ頃から鞍馬へやられ、大分痛めつけられたようでございますな」

「……………」

「陸奥の秀衡を頼るとは、なかなか思いきったやつで……」

頼朝は終始無言で、どこことなく落着かず、いらいらしている様子だった。日頃不用意に見せる奇妙な狎れ狎れしさは全く忘れはてしまったような、とりつき難い表情である。全成はふと思いついて何げなく言ってみた。